

没理想論争注釈稿 (十)

坂井健

〔抄録〕

森鷗外と坪内逍遙による、近代文学史上最大の論争といわれる「没理想論争」についての注釈のうち、逍遙の鷗外への反論である「烏有先生に答ふ」(三) についての注釈の続き。「没理想論争」については、さまざまに論じられているが、そうした論が細部の読みの共通理解の上でなされているかという点、必ずしもそうとはいえず、ややもすれば机上の空論になりかねない現状がある。また、注釈についても、これまでは語釈レベルにとどまり、視点も個別作家の文学論としての見方に限定されがちであった。

そこで、本稿では、語句の注釈から出発して、解釈にまで踏み込み、両者の文学論争を総合的に捉えることを第一の目的とする。さらに時代を代表する両者の論争を通して、当時の文学思潮を探り、論争の後の文学史に対する影響についても考察を試み、「没理想論争」を文学史の中で新たに位置づけることを第二の目的とする。

キーワード 森鷗外、坪内逍遙、没理想、イデー、ハルトマン

烏有先生に答ふ(前号よりの続き)

夫れ没理想といふ造語は頗る不穩なる造語にはあれども、わが当初の意見によれば、「衆理想を容るゝに足る」の謂ひにして、畢竟は不

見理想即ち理想のおぼろげなるを評したる詞なりき。^② シェイクスピアが傑作の一面相を指せる詞にして、近松が傑作の一面相を指せる詞なりき。さるからに、シェイクスピア近松が、悉皆の作の一面相にもあらねば、勿論悉皆の戯曲の一面相にもあらず。われ未だ嘗て、総て

のドラマは没理想なり、とはいはざりしなり。花形の宝鏡の磨ける一面は、森羅万象を映すと同時に、無形なる妖怪の相をも映せり。⁽⁴⁾これはこれ宝鏡の威徳なり。われ豈に此のいやちこなる大威徳を、他の玻璃製の小鏡に望まんや。シェークスピアは、譬へば花形の宝鏡なり、かるがゆゑに、其の一面に能く万理想の影を映す。他の千万の戯曲家、豈に悉く花形の宝鏡ならんや。恐らくは、残れる戯曲家の多数は玻璃鏡に喩ふべく、曇りたる破鏡に喩ふべし。彼等いかでかは万理想を映さん。

注

- (1) 没理想といふ造語は頗る不穩なる造語にはあれども、「没理想」は「無理想」だと鵜外が誤解したことを指す。逍遙の意図は、「無理想」ではなく、理想が隠れて見えないの意。なお、初出には、句読点はない。
- (2) 「衆理想を容るゝに足る」の謂ひにして、畢竟は不見理想即ち理想のおぼろげなるを評したる詞なりき・初出「不見理想の謂にして理想のおぼろげなるを評したる詞なりき」。「衆理想を容るゝに足る」はさまざまな解釈を当てはめることができる、の意。逍遙のいう理想は多義で曖昧な面を持つが、おおむね作者の人生観を指し、その人生観がさまざまに解釈でき、固定されないさまをいう。
- (3) 傑作の一面相・ある一つの面のありさま。後の「その作の全局が酷だ造化の無底無辺なるに似たりといふ意なり。」に呼応する。あらゆるシェークスピアの作品が「没理想」だというのでもないし、傑作であっても、その人物にいたるまですべてが「没理想」だというのでもない。傑作のうちの、ある一定の点についていっているのだ、という限定。
- (4) 森羅万象を映すと同時に、無形なる妖怪の相をも映せり・目に見

える宇宙全般を映すだけではなく、目に見えないあやしいもの姿をも映す。単純な写実ではなく、ものごとの本質を突いている、ということ。

(5) いやちこ・きわだった、の意。

(6) 玻璃製の小鏡・ガラス製の小さな鏡。凡庸な戯曲家を指す。

(7) 其の一面・初出「其一面」。以下、この用字の異同は示さない。

われ先きに没理想の語義を弁じて、其の序に、没理想とは活きたる差別相の表面にして、活きたる差別相は活きたる没理想の裏面なる由をいひき。⁽¹⁾この弁はなほだ漠然たれども、わが所謂没理想の、大ドラマに伴ふべくして、小ドラマには伴はざることをいひたるものなり。

(此の理は他日別に弁明すべし。) 詞を換へていへば、大なるドラマ——活きたる差別相の具れるもの——は、没理想なれども、悉皆のドラマは没理想にあらず、即ち没挿評の詩(ドラマ)は必ずしも没理想の作にあらず、との義なり。案ずるに、先生はわが没理想の例證として、鬼貫の俳句と宗吾が略伝を引きたるを見て、没挿評即没理想の意と解せられたるならんが、⁽⁵⁾わが本意は然らず。鬼貫の句と宗吾の伝とは、詩論の例證として引きたるにはあらずして、解の自在なるべき例に引けり。⁽⁶⁾われは俳句の尋常の叙情詩たることを思はざるにあらず、はたまた実伝の曲ぐべからざる由を知らざるにもあらず、しかるに尚ほ是れらを引きたるは、叙情詩、実伝の曲ぐ可からざるものすら、⁽⁸⁾時に解釈の自在なるは、本人の評釈なきが為なり、まして大戯曲の精妙なるに至りては、理想かくれて見ること難きが故に、種々の解釈を生ずべし、との意なり。⁽⁹⁾こは常識の談にして秋毫の不思議も無きこと

なり。われ平生此の理を、鬼貫の句に於てよりも、芭蕉の句に於て認め、芭蕉の句に於てよりも、東西の俚諺に於て認めたりき。されども、われ未だ夢にだに、芭蕉を大なる戯曲家ともせざれば、俚諺を戯曲なりと信じたることなし、わが本意は、没挿評即大戯曲にあらねばなり。没挿評即没理想ならぬ由も、上文の中に明かならぬ。

注

(1) われ先に没理想の語義を并じて、其の序に、没理想とは活きたる差別相の表面にして、活きたる差別相は活きたる没理想の裏面なる由をいひき。「われ先に」は、初出「われ前号に」。「没理想の語義を并ず」(『早稲田文学』八号、明治三十五年一月)に「活きたる差別相とは、個々の人物、おの／＼その特質を有し、作家の性情を脱離して云為するをいふ。活きたる平等相とは、取りも直さず、活きたる差別相の裏面をいふものにて、作家の性情を脱離するといふこと以外ならず。即ち没理想なり。」とある。

(2) はなはだ・初出「甚だ」。

(3) 大なるドラマ——活きたる差別相の具れるもの——は・初出「大なるドラマ(活きたる差別相の具れるもの)」は。

(4) 没挿評・作者が登場人物について、直接評価をさしはさまないこと。「没挿評の詩(ドラマ)は必ずしも没理想の作にあらず」とあるのは、作者が直接人物評(生まれついでての悪人であるとか、正直ものであるとか)をさしはさまない場合でも、戯曲全体から見ると、はっきり作者の人生観・価値観が窺える場合もあるわけで、そのことをいっている。

(5) 先生はわが没理想の例證として、鬼貫の俳句と宗吾が略伝を引きたるを見て、没挿評即没理想の意と解せられたるならんが・「シェークスピア脚本本評註緒言」(『早稲田文学』創刊号、明治三十四年一〇月)で、逍遙が鬼貫の「なんで秋の来たとも見えず心から」の句と、佐

倉宗吾の略伝とを例に上げて、本人の注釈や詳伝がないために、かえってさまざまな解釈が可能になっている、と述べたことに対して、鷗外が「早稲田文学の没理想」(『柵草紙』二七号、明治三十四年一月)で、「キング、リヤア」の悲劇は馬琴の作に似て勸懲の旨意いと著く見えたれども、作者みづからが評論の詞、絶えて篇中になきゆゑ、見るもの、理想次第にて強ち勸懲の作とも見做すを要せず、別に解釈を加ふること自在なり。」「早稲田文学が八犬伝にあきたらざる所ありとするは、豈馬琴が叙事の間に評を挿みしを以てならずや。われは其意を取りて其言を取らず。没理想は没理想にあらずして、没挿評なればなり。」と難じたのを受ける。

(6) 引けり・初出「入けり」。

(7) 尚ほ是れらを・初出「尚これらを」。

(8) 曲ぐ可からざるものすら・初出「曲ぐ可らざるものすら」で、「ものすら」に圈点。

(9) 理想かくれて・初出「理想埋没して」。

(10) 平生此の理を・初出「平此代理を」。初出は単純な誤植であろう。

(11) 芭蕉の句・逍遙は、「シェークスピア脚本本評註緒言」で、「古池や」の句を引いている。

(12) 上文・これまでの文章。この段は、鷗外が「没理想」は「没挿評」に過ぎないのではないかと感じたことに対する反論。

われ已に没挿評即没理想といはざれば、叙情詩と小説とは没理想に至ること能はず、といひしことも無し。挿評の理想を見えしむる證據に曲亭が作を引用したることは、小説が没理想たる能はず、といふ論の證とはならず。曲亭は小説家の随一人なれども、小説家の全体にあらずればなり。われ嘗て『梅花詩集』を評せし時、いさゝか此の点に触れていひけらく、「詩人の筆に上る世界二つあり、心の世界と物の

世界となり。甲は虚の世界にして理想なり、乙は実の世界にして自然なり。理想を宗とする者は、我れを尺度として世間を度り、自然を宗とする者は、我を解脱して世間相を写す。前者は総称して叙情詩人といふべく、後者を総称して世相詩人といふべし。前者能く大なることを得ば、或ひは天命を積し得て、一世の予言たらん。後者能く大ならば、或ひは造化を壺中に縮めて、長永に不言の救世主たらん。理想家の作の大なるには、作者著大にして乾坤を呑み、造化派の作の大なるには、造化活動して作者其の間に消滅す。されば、叙情詩人には理想の高大圓滿なることを望むべく、世相詩人には理想の全く影を隠して、単へに世態の著からんことを望むべし。又甚だ小ならば、二者共に現在を離れ得ずして、叙情家は一身の哀観を歌ひ、世相派は管見の小世態を描かん。(中略) 要するに、理想派の諸作には、作者の極致となせる所躍然として毎に飛動し、造化派の傑作には作者の影全く空し。叙情詩人の大なるは、猶ほ雲に冲る高嶽の如く、彌々高うして彌々著く、世相詩人の大なるは、猶ほ辺無き蒼海の如く、彌々大にして彌々茫茫たり。前者は猶ほ万里の長堤の如く、遠うして更に遠しといへども、詮するに、踏破しがたきにあらず、後者は猶ほ底知らぬ湖の如し、深くして更に深く、終に其の底を究む可からず。是れを二者相違の要点とす」と。これ実に逍遙が理想中にある叙情詩人とドラマチストとをわきまへたるものなり。此の文を味はる人は、わが叙情詩家を貶せざることを察知するに余りあらん。先生の現身鷗外漁史、嘗て此の論の是非を弁析せしことあり、われ、よりて覚る所ありき。「世相詩」といふ杜撰の造語の、甚だ不穩なるを覚

ると同時に、わが解の不足にして誤解せらるべきを感じ、且つ叙情を虚とし、世相を実とし、二者を截然と虚実の左右に分離せしことの非なるをも覚りき。然り、我が当初の理想は、幾分か漁史が教へによりて変移したり。われはもはや虚実といふ漠然たる詞をもて二者を分かつたず、大いに我が見処を改めたり。さもあらばあれ、叙情詩人の極大なるは、我れ今も尚ほ予言者と信じ、ドラマチストの極大なるをば、はた旧に依りて、不言の救世主と信ぜり。救世主と予言者と、其の間に差別はあるべきが、大叙情詩家あることを認めたるや明かなり。われいはずや、叙情詩家の大いなるは、作者著大にして乾坤を呑む、と、即ち有理想即無理想の謂なり。是れ豈に大叙情詩家はた没理想家たることを得と云ふに同じからずや。若し夫れ小説とドラマとの関係、並びに小説が没理想たるべきかあらぬかに就いては、われ曾て説きしこと無ければ、不然といひしことも無し、管々しければこゝにては弁せず。先生が詰問に対しては、前文答へ得て余りあるべし、と思ふ故なり。

注

(1) われ已に没挿評即没理想といはざれば、叙情詩と小説とは没理想に至ること能はず、といひしことも無し。鷗外が「早稲田文学の没理想」で「主観の情を卑みて、客観の相を尊む。是に於て乎、今の叙事詩すくなき世にありては戯曲をして第一位に居らしめざることあたはざるべし。これを早稲田文学が没理想を説きて戯曲を嗜む所以とす。」と難じたのを受け、鷗外の理解は、「没理想」とは、作者の主観が現れないことであり、そのためには、作者が登場人物に

ついで説明をさしはさまない「没挿評」であるべきだ、との主張に他ならない、というものであった。これは必然的にジャンルの優劣論に結びつく。鷗外の「没理想」理解にしたがえば、「没理想」の作品は、戯曲でなければならぬことになり、戯曲こそが、最上の文芸ジャンルということになってしまふ。これに対して、逍遙が反論したものの。

(2) われ嘗て『梅花詩集』を評せし時・「梅花詩集を読みて」(『読売新聞』明治二四年三月二日(二四日)を指す。「梅花詩集を読みて」は、中西梅花『新体梅花詩集』(明治二四年、博文館)に対して、梅花は老荘思想を歌った主観的な詩人であると断じ、造化本来空と唱える老荘思想と、自己の主観を主張しようとする梅花の態度との矛盾を難じたもの。

(3) 詩人の筆に上る世界二つあり、心の世界と物の世界となり。甲は虚の世界にして理想なり、乙は実の世界にして自然なり・伝統的な虚実論を踏まえたものであるが、二葉亭の『小説絵論』における虚実の概念との対応も考えるべきである。「虚」は、鷗外の用語では「想」にあたる。

(4) 理想を宗とする者は、我を尺度として世間を度り、自然を宗とする者は、我を解脱して世間相を写す。「梅花詩集を読みて」において逍遙は、理想詩人と自然詩人との別を立て、両者を対立的に捉えた。逍遙によれば、梅花は理想詩人である一方で、その理想は老荘思想である。老荘思想は、我を解脱したものであるから、梅花の態度は矛盾していることになる。(2) 参照。

(5) 予言たらん・初出「予言者」。「梅花詩集を評す」では「予言者」なので、本注釈底本の『逍遙選集』の誤植。

(6) 造化を壺中に縮めて、長永に不言の救世主たらん・文学作品は宇宙・世界の似姿であり、そのために声高に主張を訴えること無しに、暗暗裏に人生・社会を批判することができるという逍遙の考えは、『小説神髓』に、すでに「造化の翁が造り做したる活世界ハ極めて広大無辺にして規模のあまりに大なるから凡庸稚蒙の眼を以ては原因

結果の関係をバ察り得ることとく難かりしかるを我党小説作者が其因果の理の要を摘みて一小冊子のうちに蔵めて点検取捨する便に供ふ其任豈に重からずや」とあるように、一貫していた。

(7) 隠して・初出「蔵して」。「梅花詩集を評す」も「蔵して」。

(8) 造化派の傑作・初出「傑作」に圈点。「梅花詩集を評す」も同様。

(9) 猶ほ雲に冲る高嶽の如く・初出「猶雲に冲る高嶽のごとく」。「梅花詩集を評す」も同様。以下も同様。「逍遙選集」収録にあたって、用字を改めたものであろう。「冲る」はそびえ立つ。

(10) 後者は猶ほ底知らぬ湖の如し・「シェークスピア脚本評注」にも、「げにや、シェークスピアは空前絶後の大詩人ならん。其の造化に似て際涯無く、其の大洋に似て広く深く、其の底知らぬ湖の如く、普く衆理想を容るゝ所は、まことに空前絶後なるべし。」とある。

(11) 察知するに・初出「察するに」。

(12) 先生の現身鷗外漁史・鷗外は、「早稲田文学の没理想」で、「ここに烏有先生といふ談理家ありけり。理を談ずることを旨とする一大文学雑誌を発行せむとおもへども未だ果さず。」と述べて、「烏有先生」は、あたかも『柵草紙』発行以前の自分であるかのような書き方をしている。そのため、逍遙は「烏有先生」は、鷗外が自身を仮託した存在と理解するのだが、「逍遙子と烏有先生と」(『柵草紙』三〇号、明治二五年三月)で、「烏有先生とは誰ぞ。答へてはいはく。独逸の人カル、ロオベルト、エツワルト、フオン、ハルトマンなり。」とはぐらかされることになる。

(13) 嘗て此の論の是非を弁析せしことあり・鷗外は、「逍遙子の諸評語」(『柵草紙』二四号、明治二四年九月)で、「逍遙子が叙情・世相の二派は、ハルトマンが審美学上、叙情詩、叙事詩の二門に当れり。」「われおもふに所謂理想主義を叙情詩の門の占有に帰し、所謂實際主義を叙事詩の門の占有に帰する如きは恐らくは妥ならざる論ならむ。」と述べており、これを指している。

(14) 「世相詩」といふ杜撰の造語の、甚だ不穩なるを覚る・「梅花詩集を評す」では「叙情詩人」に「リ、カル・ポエト」、「世相詩人」に

「ドラマチスト」のルビがある。したがって、「梅花詩集を評す」の「世相詩」は、ジャンルとしての叙事詩を指すようでないが、戯曲をも含むようでもあり、しかも、逍遙の論の中では、自己の主観を抑制して創作に当たった作品に対しても使われているので、「杜撰の造語」といった。

(15) 叙情を虚とし、世相を実とし、二者を截然と虚実の左右に分離せしことの非なるをも覚りき・初出「虚」、「実」に圈点。「梅花詩集を評す」における虚実二元論的態度への反省。(4) 参照。ただし、当の鷗外も、虚実二元論的な批評を展開していたのであり、逍遙の没理想論はそうした当時の批評のあり方への批判から生まれたものであった。(坂井健「没理想論争の背景——想実論の中で——」『稿本近代文学』二三集、一九九八年一月) 参照。) したがって、逍遙の自己反省は、鷗外に対する攻撃の矢ともなっているのである。

(16) われはもはや虚実といふ漠然たる詞をもて二者を分かつたず、大いに我が見処を改めたり・虚実、主観客観の対立を止揚する概念が「没理想」すなわち、隠れて見えない理想ということになる。つまり、偏った主観でもなければ、純客観でもないのだ。こうした考え方は、後の自然主義の成立にも受け継がれて行く。(坂井健「没理想論争と田山花袋——『野の花』論争における『審美新説』の受容をめぐる——」『稿本近代文学』二五集、一九九八年一月発行予定、および、同「田山花袋と高瀬文淵——花袋のハルトマン受容をめぐる——」『京都語文』三号、一九九八年一〇月、参照。)

(17) 有理想即無理想の謂なり・主観客観の対立の止揚統合。(16) 参照。
 (18) 先生が詰問に対しては、前文答へ得て余りあるべし、と思ふ故なり・鷗外は、「没理想」を「没主観」、「没挿評」と誤解したために、ジャンルの優劣論に踏み込み、「小説とドラマとの関係、並びに小説が没理想たるべきかあらぬか」を勝手に問題にして、自分を詰ったのだけれど、自分のいう「没理想」は、「没主観」でも「没挿評」でもないのだから、鷗外の批判は外れている、との主張。(1) 参照。
 「前文」は本段を指す。なお、中村完氏注釈(角川日本近代文学大系

『坪内逍遙集』)は、「前文」を「没理想の語義を弁す」と注釈するが、不適。直前の「管々しければこゝにては弁せず」に対して、その理由の説明として、「前の文章で十分に答えている思うからだ」の文脈にあり、小説が没理想になりうるかどうかは、この段の冒頭で問題にされているからである。

先生また叙事詩の旨の純粹なる客観相たることをいひて、わが叙事詩的没理想を取らざる由縁を怪しまれき。^①是れもまた先生が、わが好尚する唯一^②点をば没理想なり、と思はれたるより生じたる誤解ならん、こは弁すべき必要なし。

注

- (1) 先生また叙事詩の旨の純粹なる客観相たることをいひて、わが叙事詩的没理想を取らざる由縁を怪しまれき・「早稲田文学の没理想」に「叙事詩の旨は純粹なる客観相にあれば、その没理想に至り易きこと迥に戯曲の上にあらむに、没理想を説く人の戯曲を取りて叙事詩を取らざるは何故ぞ。」とあるのを受ける。
- (2) 唯一・初出圈点。

(以下次号に続く。)

(さかい たけし 国文学科)
 一九九八年一〇月一四日受理